

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

【獣医師体験プログラム】

獣医師の職域は広く、ペットの暮らしや産業動物の飼育、野生動物の保護、感染症や食品衛生、環境問題など、人が生活していく上で必要な多岐の分野に関わっている。そうした幅広い獣医師の世界を体験して学びを深めることにより、「人と動物の共生」が人の生活に深く関わるものであることへの気付きを促し、様々な「人と動物の共生」の在り方についての理解を深める。なお、「獣医師体験プログラム」の監修は、獣医師・獣医学博士で当法人監事である堀尾政博先生にお願いしている。



【監修】

堀尾 政博先生（獣医師／獣医学博士）

産業医科大学医学部講師を経て、長崎大学熱帯医学研究所 教授（平成29年退職）。

長崎大学では、高度安全実験施設（BSL4）の設置準備副室長としても活躍した。

学校法人ヤマザキ学園（動物看護・ケア教育）

で副校長を務めた経験も持つ。

令和4年度は下記の通り「獣医師体験プログラム」を開催した。毎回、現場で働いておられる専門分野に長けた獣医師の先生方を講師としてお迎えし、現場の話をお聞かせいただきながら、スライド、標本なども見せていただくことで、子どもたちが普段経験することのないような貴重な学びの場を提供することができた。

令和4年度：13回実施（複数実施含む）

開催日	タイトル	分野	協力依頼・講師	参加者	保護者
令和4年 5月22日 (日)	お肉はどこから来るの？	食品衛生	神戸市 食肉衛生検査所・ 南優姫 先生	8	8
6月25日 (土) 低・高学年 2回開催	水族園動物のお医者さん	水族園	神戸市立 須磨海浜水族園・ 毛塚千穂 先生	24 低学年 12 高学年 12	23
7月29日 (金)	多様な動物が生きる「地球」という環境	動物園	神戸市立 王子動物園・ 馬場琢也 先生	8	6
8月4日 (木)	感染症って何？	公衆衛生	大阪公立大学 獣医学研究科・ 笹井和美 先生	5	5

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

8月22日 (月)	公務員としての 獣医さんの仕事	公務員	神戸市動物管理 センター・ 大隈真矢 先生	8	6
9月4日 (土) 低学年	野生動物との 共生	野生動物	株式会社野生動物 保護管理事務所・ 箕浦千咲 先生	6	9
9月23日 (金・祝) 高学年				16	16
10月15日 (土) 低・高学年 2回開催	いちばん身近な 存在「ペット」 の健康と幸せを 守るには	小動物	大阪公立大学 獣医学研究科・ 酒居幸生 先生	16 低学年 6 高学年 10	18
12月10日 (土)	身近な大動物・ 牛	大動物	芝崎牛の診療所・ 芝崎繁樹 先生	8	8
令和5年 2月5日 (日)	人と共に生きて きた馬について	大動物	大阪公立大学 獣医学研究科・ 石川真悟 先生/ 公益社団法人神戸 乗馬倶楽部	14	4
2月26日 (日)	私たちの暮らし と動物との関わり	産業動物	兵庫県農業共済組 合（神戸市立 六甲 山牧場）・ 畠中みどり先生	9	11
合 計	13回実施			122人	114人

令和4年度においても、幅広い獣医師の世界を体験して学びを深めることにより、「人と動物の共生」が人の生活に深く関わるものであることへの気づきを促し、様々な「人と動物の共生」の在り方についての理解を深めることができた。人格の発達や、自律心、判断力、責任感等の人間性を育み、他者との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識することで「関わり」や「つながり」を尊重できる個人を育むという観点から、今後も持続可能な社会の創り手の育成に貢献できることを目指したプログラムとしたい。

来年度においては、子どもたちのアンケートから希望の多かった、エキゾチックアニマルについて神戸市獣医師会のご協力を仰ぎ、獣医師会所属の先生に講師をお願いする予定になっている。子どもたちの興味・関心を引き出し、学ぶ意欲を持てる内容になるよう工夫している。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

【お肉はどこからくるの？】

人間は、動物の「いのち」をいただくことによって生きていくことができる。適切な環境で家畜を飼育して家畜に対する福祉を担保しつつ、安心・安全な食肉を提供するために必要なことを学ぶ。

開催日時：令和4年5月22日（日）14:00～15:00

開催場所：共生センター ふれあい室

講師：神戸市健康局 食品衛生課 食肉衛生検査所・南優姫先生

参加人数：子ども8名 保護者8名 計16名



今回のお話の主な内容

- ①いのちがお肉になるところ
- ②お肉の安全と危険
- ③獣医師のお仕事

人の健康を守るために動物や生態系の健康を守る、そして、家畜や野生動物の健康を守ることが人の健康を守ることにつながる＝ワンヘルス

「うちは精肉店」の本の読み聞かせ。生きもののいのちをいただいて、いのちを生かす。「生きるということはいのちをつなぐということ」そして、「いのちをいただいているということ」を忘れず、感謝して食べてほしい」と子どもたちに伝えていただいた。



スライドを見ながらクイズを出題。生野菜のサラダの上に生肉が一緒にある写真の「どこがおかしいかな？」子どもたちも真剣に考えて答えていた。



行政獣医師の仕事の大切な役割として、食肉市場でのと畜検査員としての仕事についても教えていただいた。「病気をもらっていないか」「衛生的に解体できているか」「有害な物質が残っていないか」ということを検査している。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

《先生より頂いた配布資料》



《参加者の感想より一部抜粋》

- ・家畜が出荷されるまでの話は、本でみたりテレビで見たりしてうっすらと知ってはいましたが、今回のお話ではっきりと分かりました。
- ・じゅう医は動物の病気を治すだけだと思っていたけど、とちく場でも働いているというところが初めてしてっておもしろかったです。
- ・お肉にはいろいろなきんがあるというのをしてくれよかったです。

食肉は、普段の私たちの生活の中でも、切り離せないものとなっているが、なかなかその加工や流通の過程を知る機会がない。獣医師の仕事には、食品衛生に関わる部門もあり、自分たちの知らない間に、獣医師の仕事が食生活にも関わっているということを知り、あらためて獣医師の仕事内容が動物の診療だけではなく、幅広く自分たちの生活に関わっていると感じた様子だった。食肉の話などは、普段あまり聞く機会のない内容ではあるが、日頃から食べているお肉はどのように加工され市場で販売されているのか、ということを知ることによって、食への感謝の気持ちが育まれ、獣医師を希望している子どもにとっては、選択肢の一つとしてこのような仕事内容も獣医師としての重要な仕事であるということがわかったようだった。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

【水族園動物のお医者さん】

水族園には多様な生きものが暮らしている。その健康を守るには、本来の生育環境や生態を背景とした生きものの特徴を知ることが大切である。水族園で暮らす動物たちの病気や治療について楽しく学ぶ。

開催日時：令和4年6月25日（土）低学年：13:00～14:00／高学年：14:30～15:30

開催場所：共生センター ふれあい室

講師：神戸市立須磨海浜水族園・毛塚千穂先生

参加人数：子ども24名 保護者23名 計47名



ペンギン、カピバラ、イルカの本物の頭蓋骨を持って来ていただいた。標本に触れることもできるので、水族園の動物のことをより身近に感じてもらうことができる。

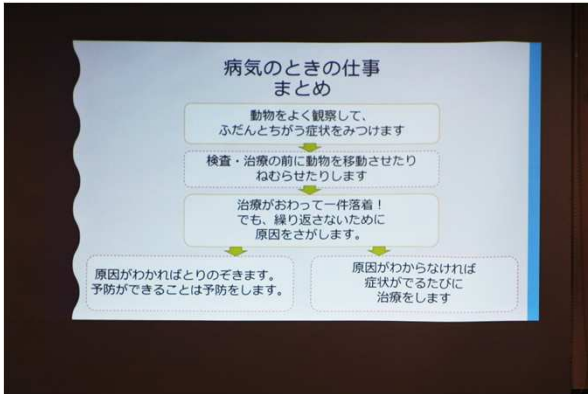
「みなさん、スマスイに来たことありますか？」毛塚先生の問いかけにはほぼ全員の手が元気に挙がった。



魚をまる飲みにしてしまうイルカの口は大きく開くと説明がある。イルカは好奇心旺盛なので、水に浮かんだ葉っぱなども食べてしまうが、消化できないため胃にたまり病気になったり死んでしまったりすることがある。そんな場合、獣医師が内視鏡を使って胃の中の葉っぱを除去することもあるとのこと。

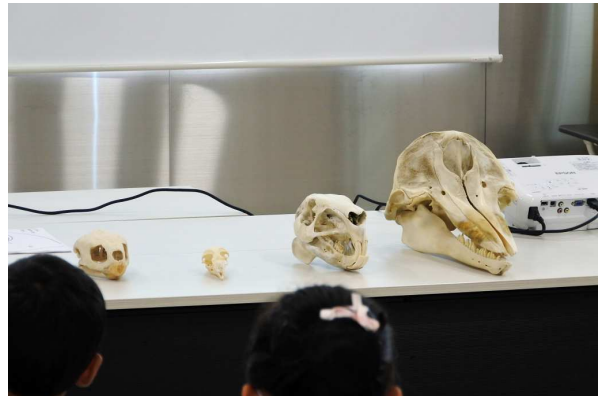
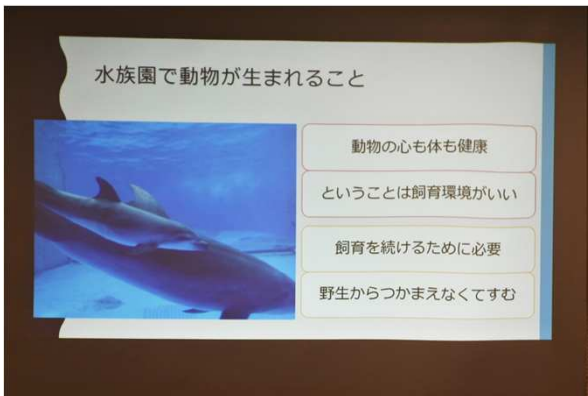
須磨海浜水族園にいるカピバラの歯の治療の様子。イルカにくらべるとあまり大きく口が開かないため、治療には1時間程度かかる。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業



水族園の動物が病気になったときにはどのようにしているのか、対応について説明していただいた。

イルカやカピバラなど、それぞれの食生活の違いから歯や口の開き方などの状態もかわってくるとの説明。



須磨水族園のイルカが出産した際の珍しい出産シーン。イルカは水中で出産をし、頭からではなく尻尾から出てくる。

イルカ、ペンギンなどの骨の標本。それぞれの大きさの違いなどがよくわかる。

《参加者の感想より一部抜粋》

* 低学年

- ・カピバラの歯のお話がおもしろかったです。
- ・イルカが生まれるときの動画、イルカの赤ちゃんが私と同じ体重だった。他の動物が生まれるときのことも聞いてみたい。

* 高学年

- ・しゅっさんの時の動画がおもしろかったです。
- ・イルカの出産のお話を聞いたことと、出産の映像も初めて見たので、おもしろかったです。
- ・獣医の仕事がくわしく分かったし、カピバラについてくわしく知れたことがおもしろかったです。

子どもたちがよく訪れている水族園の先生からの具体的な治療や飼育の話、実際に貴重な標本に触れることで楽しく学ぶことができた。また、現場の先生の話を通じて直接聞くことにより子どもたちのイメージも広がり、海に生きる動物への興味も深まったのではないかと感じる。特にイルカの出産シーンは低学年の子どもも高学年の子どももとても印象深かったようである。また、低学年と高学年に分け、伝え方についても工夫していただくことで、理解度も深まったと思われる。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

【多様な動物が生きる「地球」という環境】

地球（動物園）には様々な種類の動物が生活しているが、それぞれ生きていくために必要な食べ物や環境などが違う。そうした多様な生物が生きていくことができる地球を持続可能な環境として保持するために必要なことを学ぶ。

開催日時：令和4年7月29日（金）14：00～15：00

開催場所：共生センター ふれあい室

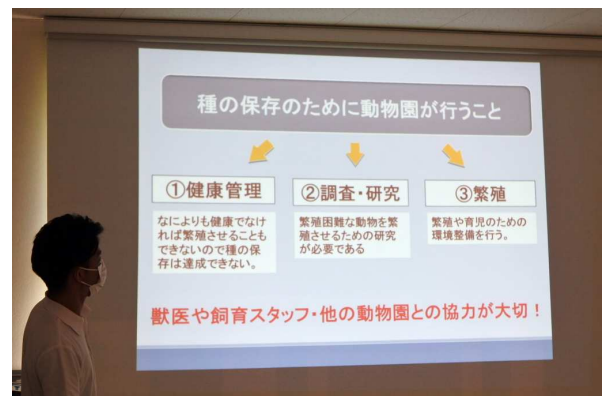
講師：神戸市立王子動物園・馬場琢也先生

参加人数：子ども8名 保護者6名 計14名



スライドを見ながら、動物園の動物たちの話から、地球環境の話まで幅広い内容をお話しして下さる。また、多様性についての説明もあり、全てが繋がっているということがわかる。

パンダの検査の方法について教えていただいた。パンダはリンゴが好きだということで、検査後はご褒美にリンゴを与えている映像を見せていただき、パンダが人間並みの検査を受けていることに、子どもたちも驚いていた。



野生動物を取り巻く環境は厳しく、象の生活する森も、人間が利用するパーム油のとれるアブラヤシに変えられたことで、熱帯雨林が減少し、それにより多様性が奪われ、動物が生存するのが厳しくなっている映像を見せていただいた。子どもたちは真剣に聞き入っていた。

動物園の役割についての説明。ただ、動物を見て楽しむだけではなく、種の保存についても大きな役割があると説明していただいた。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業



先生が持ってきてくださった動物園の動物の様々な標本。象の牙のレプリカと象の尻尾の毛、クジャクの羽、ダチョウの卵、ヤマアラシの棘、カメの甲羅等。



様々な標本を実際に触らせていただき、感触や重さなどを感じていた。標本の詳しい説明もしていただきながら、子どもたちは興味津々な様子。

《参加者の感想より一部抜粋》

- ・ 絶めつきぐ種や、今の問題についての対策。
- ・ 動物園の役割が分かったこと。
- ・ 人間の都合で森林破壊されていた話（が印象にのこった）
- ・ うさぎのみみからさいけつしていてびっくりしました。
- ・ どうぶつのちりょうがそういうかんじなんだなとおもいました。
- ・ 文章や説明だけではなく、映像も結構多かったので面白かったです。

子どもたちにも馴染みの深い動物園の動物ということで、子どもたちも興味深く先生のお話を聞いていた。また、動物を取り巻く環境が破壊されてきている現実を目の当たりにし、子どもたちなりに真剣に考えていた様子だった。愛嬌のあるパンダなど動物園のいろいろな動物たちの生態や飼育方法を知ることや、普段見ることが無い動物園のバックヤードも映像で見ることができ、子どもたちがこれまで知らなかったことを学べる機会となった。動物の生態のみではなく、動物を取り巻く地球環境の話まで幅広く獣医師が関わっているということも理解できた様子だった。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

【感染症って何？】

新型コロナウイルスの感染症拡大の只中である現在、動物由来の感染症についての正しい知識を学習し、日常生活における感染症対策の重要性を知る。

開催日時：令和4年8月4日（木）13:30～14:30

開催場所：共生センター ふれあい室

講師：大阪公立大学 獣医学研究科 獣医内科学研究グループ
教授 笹井和美先生

参加人数：子ども5名 保護者5名 計10名



感染症とは？

最初に、感染症とは何かについて説明していただいた。感染症とは、病原体（ウイルス／細菌／真菌（カビ）／寄生虫等、病気を起こす小さな生物）が体に侵入して症状が出る病気のこと。

インフルエンザ、麻疹のように「人から人へ感染する病気」や、犬のフィラリア症のように「動物から動物へ感染する病気」「動物から人、あるいは人から動物へ感染する病気（人と動物の共通感染症）」についても、狂犬病を例に出して教えてくださった。



予防（うつらないようにするには）

日本は、その他の国と比べて感染症対策がしっかりできている国らしく、「予防の基本と言われる《手洗い・うがい・消毒・マスク着用》といった対策を、これからも続けていってください」とお話があり、正しいうがいの方法についても紹介していただいた。

感染しないためには予防が大切であるとのこと。

病原体が体内に侵入したら、すぐに症状が出るわけではなく、症状が出ない潜伏期間を経て病原体が体内で増殖することによって感染となり、下痢等の症状がでる。病原体が体内に侵入したときに、たまたま体調が悪かったりすると、抵抗力が落ちているために病原体が増えやすいそうだ。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業



免疫の3つの主な仕組み

- ・病原体を食べる（好中球・マクロファージ）
- ・抗体を作る（B細胞）
- ・感染細胞を殺す（キラーT細胞）

ワクチンや薬もあるが「薬の力だけでなく、自分で治そうとする力も病気に勝つためには必要です」とお話ししていただき、体から病原体を減らすことで病気が治っていくという仕組みについても詳しく説明していただいた。



参加者全員が真剣に話を聞いている。子どもたちの集中力の高さがうかがえた。自分たちでメモを取り、1時間を有意義なものにしていた。

《参加者の感想より一部抜粋》

- ・色々な病気のことを詳しく教えてもらえてよかった。
- ・狂犬病が動物から人にうつってしまったり、新型コロナがたまに人から猫や他の動物にうつってしまうことをはじめてしまった。
- ・獣医師になるために子どものうちに何をすればいいか聞いてみたい。

盛りだくさんのお話の中で、新型コロナウイルスについても「日本は世界と比べて感染症対策が行き届いている国で、コロナウイルスの場合でも、「手洗い」「うがい」「消毒」「マスク」といった感染対策をしっかりとできている国なので、感染する人が比較的少ない。しかし日本と違って感染対策を徹底するのが難しい国もある」という話を聞き、日頃の感染対策の重要性を保護者と共に学んでもらうことができた。獣医師が様々な分野で活躍されていることも詳しく教えてくださり、獣医師という仕事の幅広さに具体的なイメージを持てたようで、「もっとお話を聞きたかった」という感想も多かった。実施前は難しいテーマのように感じたが参加希望者も幅広い年齢層となり、令和5年度も継続して開催し、鳥インフルエンザについても取り上げていただく予定である。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

【公務員としての獣医さんの仕事】

公務員獣医師の仕事は、食の安全の確保、人畜共通感染症対策、動物愛護や福祉の増進、野生動物保護党自然環境保全対策等の広範な分野にわたるが、その中の動物愛護や福祉について学び人と動物の幸せな共生について考える。

開催日時：令和4年8月22日（月）14:00～15:00

開催場所：共生センター ふれあい室

講師：神戸市健康局環境衛生課神戸市動物管理センター・大隈真矢先生

参加人数：子ども8名 保護者6名 計14名

公務員としての獣医師の仕事は、「ペットショップのような動物を取り扱っている店の立ち入り」「レストランや食品工場などへの立ち入り」など、店がきちんと衛生的に営業されているかをチェックし、指導したりする仕事も含まれているため、獣医療にはとどまらず多種多様な業務内容となっている。今回は、主に神戸市動物管理センターでの仕事内容について大隈先生に詳しく話を聞かせていただいた。



大隈先生より神戸市動物管理センターとはどのような施設なのかを紹介していただいた。



「一年間でどのくらいの犬が来たと思いますか？」と先生からの質問。実際には約210頭の犬が収容された。



犬や猫が収容された場合に、必ず行う獣医療はどのような内容なのか、また、何故それを行うのかについて教えていただく。



動物たちに使用している薬の中で、ノミダニ予防薬や、フィラリア症予防薬を見せていただいた。病気の治療だけでなく、病気にならないための予防が大切である。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

神戸市動物管理センターでは、「迷子の犬猫の引取り、返還」「飼えなくなった犬猫の引取り」「負傷した動物の保護」などを行っている。

昨年、動物管理センターには209頭の犬猫が保護された。そのうち犬は38頭、猫は171頭、猫については110頭ほどがまだ小さな子猫だったとのこと。209頭保護されたうちの7頭が飼い主のもとに帰り、133頭が新しい飼い主に譲渡された。



実際に保護された犬の様子を紹介していただく。保護された後、血液検査などの健康チェックを行い、けがや病気で治療が必要な場合は治療を行う。並行して、譲渡に向けた人に慣れる訓練も開始される。保護されてまもなく、血尿が出てすぐに亡くなってしまった犬がいたという現実にも触れていただいた。



犬のフィラリア症について説明していただいた。センターに保護されている犬の中には、フィラリア症にかかっている犬も多いとのこと。フィラリア症の犬には薬を飲ませて治療を行っている。



回虫やマンソン裂頭条虫、コクシジウムなどの寄生虫がお腹の中にある犬や猫も多いとのこと。そのような場合には駆虫薬を飲ませて駆虫を行う。実際に投与している薬の実物を見せていただいた。

《参加者の感想より一部抜粋》

- ・いろいろな病気や何頭来ているかがきょうみぶかかったです。
- ・膀胱に石があるワンちゃんがいたと聞いて、何が原因で石ができるのか不思議に思いました。

今回は、公務員獣医師の仕事の中でも、特に共生センターと関係の深い神戸市動物管理センターの主な業務についての話を聞かせていただいた。

センターに保護される犬や猫はどんな病気を持っているのかなど情報が無いままでやってくる場合がほとんどであり、それに対しての治療や譲渡までの流れなど、関わっている職員の思いを知ること、これから犬や猫を家族に迎えるにあたって、共生センターから譲渡してもらうことも視野に入れてもらえた様子だった。子どもたちは保護された犬や猫の話に熱心に耳を傾けていた。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

【野生動物との共生】

里山では野生動物による農作物の被害が多発しているが、なぜそういったことが起こるのかを学ぶ。地球は人間だけのものではなく、多くの野生動物や昆虫などの生き物が共に生きる場所であることを知り、どうすれば野生動物と共存できるのかを考える。

開催日時：低学年：令和4年9月4日（土）／高学年：9月23日（金・祝）
14:00～15:00

開催場所：共生センター ふれあい室

講師：株式会社野生動物保護管理事務所 関西支社 研究員・箕浦千咲先生

参加人数：9月4日：子ども6名 保護者9名／9月23日：子ども16名 保護者16名 計47名



野生動物とはどんな動物のことなのか、野生動物の獣医師とはどんな仕事をしているのか等の説明をしていただいた。



生き物同士は全て繋がっていて、どこが多くなっても少なくなっても、すべてのバランスが崩れてしまう。



「生態系」を守る5つのルール

1. 近づかない（近づきすぎると人を怖がらなくなる）
 2. エサをあげない（人間の美味しい食べ物の味を覚えると人の住処に出てきてしまう）
 3. むやみに触らない（動物が見られたり、触られたりすることでストレスを感じたり、動物から病気が感染することもある）
 4. 逃がさない（犬や猫だけでなく、一度飼った動物は最後まで責任を持って飼う）
 5. ゴミはきちんと捨てる（人間の捨てたゴミのせいで、動物が苦しむことになる）
- 野生動物と人間が幸せに暮らせるよう、この5つを守ることで、私たちも「地球のお医者さん」になれると教えていただく。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業



スライドを見ながら、野生動物たちの足あとやフンについて説明していただいた。その後、実際にフンを見たり、標本に触れながら感触を確かめる。



熊の毛皮やモグラの手にも触れてみる。熊は兵庫県にて捕獲された熊。



イノシシの頭蓋骨。大きな口の中には沢山の歯が並んでいるのがわかる。



動物のフンや骨など、普段目にする事がない標本にも、子どもたちは臆することなく興味津々で触っていた。

《参加者の感想より一部抜粋》

* 低学年

- ・動物のピラミッドの話がおもしろかった。
- ・がいらいしゅのきけんないみがわかった。

* 高学年

- ・生物たようせいのおもしろかった。ふえすぎたら、ころすというのはかなしかった。
- ・野生動物を守ることにあつてえ、獣医さんが色々な思いで野生動物を守つたり、色々な方法・対策をして守つてることが印象に残つて感動しました。

山や海に囲まれた神戸では、山の中や街中でイノシシなど野生動物と遭遇することもある。なぜ、野生動物が街中に出てきてしまうのか、人間と野生動物とはどのように共生していけばよいのか等、野生動物の生態や生態系を守る方法などを学ぶことで、ペットとは違う関わり方、距離の保ち方についても考えるきっかけとなったようだった。また、先生の持って来られた動物の骨や毛皮など、実際に触れることでより身近に野生動物を感じる事ができていた様子だった。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

【いちばん身近な存在「ペット」の健康と幸せを守るには】

人間にとっていちばん身近に存在する動物「ペット」の健康と幸せ（福祉）を守るためには、こういったケアが必要なのかを学び、飼い主が日常的に健康状態を観察して獣医師と連携してペットの健康を守ることの大切さを学ぶ。

開催日時：令和4年10月15日（土）低学年：13:00～14:00／高学年：14:30～15:30

開催場所：共生センター ふれあい室

講師：大阪公立大学 獣医学研究科 小動物臨床教室 ・酒居幸生先生

参加人数：子ども16名 保護者18名 計34名



大学の病院には9つの診察室があり、それぞれ獣医師と動物看護師がペアになって診療にあたっている。病状によっては、レントゲン検査、超音波検査やCT検査なども行っている。



口の中が真っ白な犬の画像。考えられることは、この犬は貧血であるということ。そして、貧血の原因は何なのかを診断していく。動物たちの体の様子をくまなくチェックし、診断していく様子について教えていただいた。



動物の診察はどのような手順で行うのか。まず、飼い主さんから詳しく話を聞くことが重要であり、その後触診や検査などを行い、診断をした後、病気に合わせた薬の処方や治療などを行うと説明していただいた。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業



先生から、注射の仕方を教えてもらい、ぬいぐるみの犬を使って子どもたちも注射の模擬体験を行った。ぬいぐるみだと分かっているにもかかわらず、みんな恐る恐る注射していた（針の無いシリンジを使用している）。



心音を聞く際には、拡張心音計（心臓の音を拡大してスピーカーから聞くことができる機械）を使用し、自分の心音だけでなく、他の子の心音も聞くことで、音の大小や速さ、リズムの違いにも気づいた様子。その後、それぞれ、聴診器を使って自分の心拍数が何回か数えてみた。



獣医師になった気持ちで、猫に聴診器をあて診察を試みる。



先生の説明を身を乗り出して、みんな熱心に聞いている。

《参加者の感想より一部抜粋》

* 低学年

- ・ 獣医さんの仕事の体験のがおもしろかったです。
- ・ ちりょうのお話がおもしろかったです。

* 高学年

- ・ 自分が実際に考えている小動物の獣医師さんの話を聞いたので、全て面白かったです。
- ・ 自分のしんぞうの音がきけておもしろかったです。

犬や猫は模型を使用するが、薬や聴診器などについては実際に使用されている物を使用し、獣医師と同じように白衣を着用することで、子どもたちも神妙な面持ちで模型の動物に接していた。ペットと暮らしている子ども、ペットと暮らしたいと思っている子どもにとって、日常のケアや、自分たちがどんなことに気がつけたら良いのか等を考える機会にもなり、ペットと人間との違いや、逆に同じように犬も人間も心臓が動いていることなど新たな発見につながった。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

【身近な大動物・牛】

小型のペットとは違い、人間よりも大きな動物にはとくべつな世話や医療が必要であることを学ぶと同時に、牛が私たちの生活のあらゆる場面に関わりを持っていることを理解する。

開催日時：令和4年12月10日（土）14:00～15:00

開催場所：共生センター ふれあい室

講師：芝崎牛の診療所・芝崎繁樹先生

参加人数：子ども8名 保護者8名 計16名



兵庫県職員としてのご経歴をお持ちの芝崎先生に、退職後はご自身の大好きな牛を診療する獣医師としての仕事に従事されていることなど、自己紹介をしていただいたあと、牛とはどんな動物なのかを子どもたちに語っていただいた。

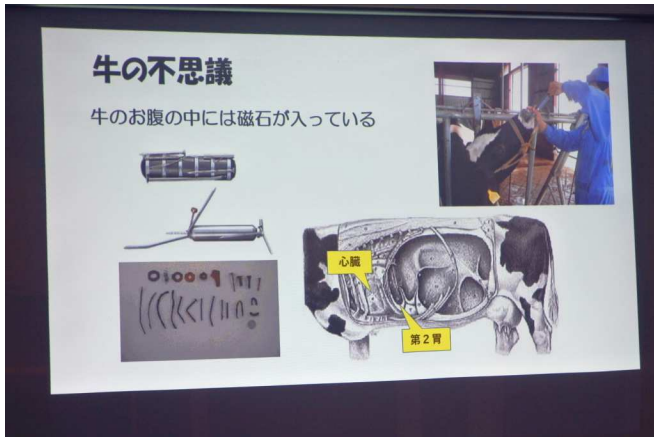
牛にはいろいろな種類があり、畜産の分野で分けると肉になる肉牛と牛乳を搾る乳牛に分けられる。またその中にも赤毛、黒毛、ホルスタイン、ジャージーなど様々な種類があると説明していただいた。

オスの牛は乳牛にはならないため、去勢したあと20ヶ月くらいで「国産牛」として肉牛になり出荷されるとのこと。



病気になった場合の診察については、牛は犬や猫のように飼い主が病院に連れて行くことが難しいため、往診となる。世話をされている農家の方から病状等を詳しく聞き取って診察を行う。写真は牛の直腸検査の様子。牛の肛門から腕を入れて、直接検査を行う。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業



牛の不思議の一つ、牛の胃の中には間違えて飲み込んでしまった鉄（釘など）が胃を傷つけるのを防ぐために細長い磁石を飲み込ませていると説明していただき、実物を見せていただいた。

その磁石は、しばらく留置したあと胃から取り出し交換するとのこと。

牛の鼻紋については、人間の指紋のように一つとして同じものは無いと教わる。鼻紋を登録することで、それぞれの個体が識別できる。

また、耳にはイヤータグという、個体識別番号が記入された黄色いタグもつけている。ウェブサイトから購入した国産牛の情報（飼育場所や移動の履歴等）を検索することができる。



《参加者の感想より一部抜粋》

- ・乳用牛の出産回数が5～6回だということを知って驚きました。
- ・ウシはさいしゅうてきに、お肉になったり、ウシに、たいおんけいがあったり、マイナンバーをもっているところが、おもしろかった。
- ・ウシにもいろいろな病気があったり、死んでしまうウシもいるんだなと思いました。
- ・人工授精の技術が、現実に活かされて乳牛、肉牛になっていることを知り驚きました。
- ・牛の不思議で、おなかの中にじしゃくを入れているのがすごいと思いました。
- ・もっと大事にお肉を頂こうと思った。

普段、何気なく食べている牛肉が肉になるまでどのように飼育されているのか、また、どのように加工されているのか。そして、牛の不思議の一つ、胃の中に磁石を飲み込んでいることなど、興味深い話を聞くことができた。

また、牛が病気をして薬剤を使用した場合、肉への残留を防ぐために、使用する薬によっては食肉用の牛に投与してはいけない期間が決められており、獣医師がこの判断を誤ると農家に大きな損害を与えてしまうことにもつながり、食の安全を守ることも、獣医師には大切な仕事であると教えていただいた。

牛の「トレーサビリティ」（食を安心して届ける）制度についても話をいただき、最後に、先生から「お肉を食べるときには、命をいただいているという感謝の気持ちを忘れずに食べてもらいたい」と子どもたちに伝えていただき、子どもたちも、牛について、食についての理解が深まった様子だった。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

【人と共に生きてきた馬について】

小型のペットとは違い、人間よりも大きな動物には特別な世話や医療が必要であることを学ぶと同時に、人が馬と共に生きてきた歴史を知ることによって胸声という概念を理解する。

開催日時：令和5年2月5日（日）14：00～15:00（当初の日程から変更）

開催場所：しあわせの村 馬事公苑 会議室（公益社団法人神戸乗馬倶楽部）

講師：大阪公立大学 獣医学研究科・石川真悟先生

参加人数：子ども14名 保護者4名 計18名（部屋の都合上、保護者の入室無し）

獣医師体験プログラムは、生体に触れる内容ではないが、馬についてはしあわせの村内に馬事公苑があることから、馬事公苑の運営を受託されている公益社団法人神戸乗馬倶楽部様のご協力を得て、馬事公苑内で実施、厩舎の見学まで体験させていただいた。



会場の都合上、室内でのプログラムは、保護者の方に見学していただくことはできなかったが、子どもたちだけでもとても熱心に先生をお話を聞いていた。

馬とヒトとの違いについてスライドを見ながら話を進めていただいた。

馬や牛などを診る獣医師のことを産業動物獣医師といい、石川先生の所属されている病院では、チーム医療で複数の先生で担当して診ているとのことだった。



馬は草だけを食べる草食動物のため、大きな盲腸がお腹の中のほとんどを占めているという話を聞かせていただいた。スライドを見た子どもたちは、馬の大きな盲腸に驚いていた。盲腸の中にある多くの菌が草を馬のエネルギーに変えており、そのおかげで馬は草だけを食べて生きていけると教わる。



④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業



馬の歯のケアも人間と同じでとても大切だと教えていただく。馬は歯が伸び続け、野生の馬は自然に生えている草を食べるので大丈夫だが、飼われている馬は歯が歪になってしまうと説明していただいた。



馬の歯を治療するとき使用する開口機と歯ブラシもを見せていただく。実際に持ってみた子どもたちからは、「思ったより重たい」と感想があった。



馬に使用するハミの発明により、ヒトが馬をコントロール出来るようになったことで、ヒトが馬に乗ることが出来るようになった。そのことから、馬とヒトとの共生に繋がっていった。また、馬とヒトとの歴史についてもお話をしていただく。



先生のお話終了後、馬事公苑のスタッフの方に案内をしていただきながら、厩舎の見学を行った。23歳になる馬の大人しく、穏やかな瞳、そして、柔らかな馬の毛並みに、子どもたちも馬の温もりを感じた様子だった。

《参加者の感想より一部抜粋》

- ・馬にもうちょうがあるということはしていましたが、もうちょうがとても大きいことは、しりませんでした。
- ・馬と人間のちがいがわかって、おもしろかったです。
- ・馬と人の歯ならびがそれぞれちがうことがおもしろかったです。

(公社)神戸乗馬倶楽部様にご協力いただき、共生センターのふれあい室以外の場所でも実施することができた。馬が大好きでどうしても参加をしたかったという子どもの参加もあり、どの子どもたちも熱心に先生のお話に耳を傾けていた。また、最後に経済動物として経済性がなくなれば処分されてしまう馬を一頭でも救おうとしている活動についてもお話をしていただき、子どもたちも印象に残ったようだった。厩舎の見学もできたことで、改めて、馬について興味を持った子どもも多かった。次年度も(公社)神戸乗馬倶楽部様と連携させていただき、馬事公苑において実施する予定である。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

【私たちの暮らしと動物との関わり】

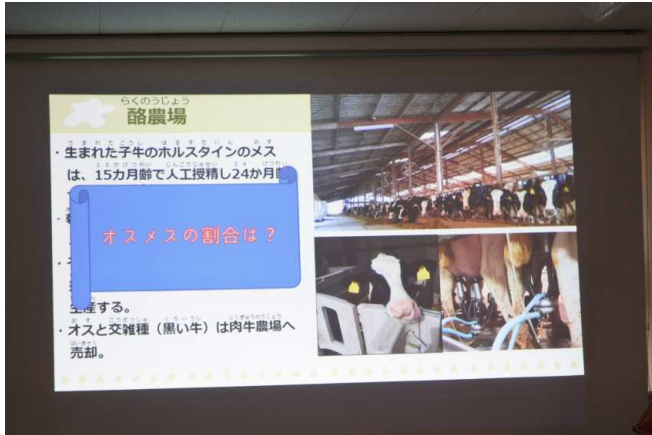
人間は様々な動物との関わりの中で恩恵を受けて生きていることに気づき、それらの恩恵に感謝する気持ちを学ぶ。

開催日時：令和5年2月26日（日）14：00～15：00

開催場所：共生センター ふれあい室

講師：兵庫県農業共済組合 家畜部 部長・畠中みどり先生

参加人数：子ども9名 保護者5名 計14名

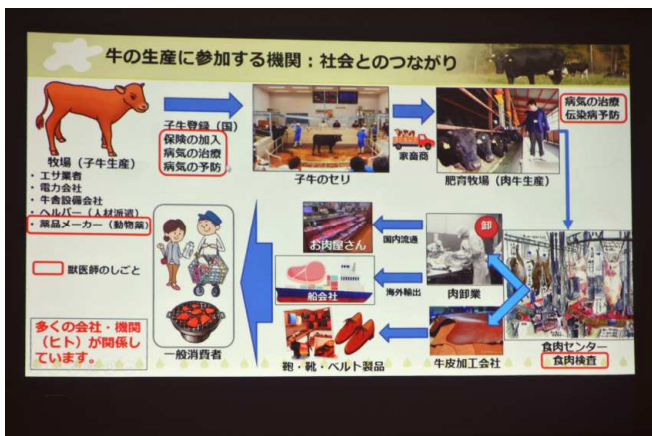


「酪農場にいる牛は、オスとメスがどれくらいいるかわかりますか？」という先生の質問に、子どもたちはどれくらいの割合でオスとメスがいるのか想像しているようだったが、すぐには見当がつかなかった。「ヒトと同じでお乳が出るのはメスだけです。だから酪農場にいる牛は全頭メスなんですよ」と先生に説明していただいて、「なるほど！」と気がついた。

牛用のマイナンバー制度である牛の個体識別番号のお話も聞かせていただいた。生年月日や生まれた場所、飼養場所など移動履歴までわかるようになってきている。子どもからは「牛のマイナンバーは同じ番号にならないのですか？」という質問があったが、日本国内全ての牛たちの10桁の個体識別番号は、独立行政法人家畜改良センターで管理されているため、同じ番号にはならないとのこと。



実際に購入した牛肉のシールに記載の個体識別番号を入力して検索してみると、その牛は熊本県の牧場で生まれ、長崎県の牧場で育てられ、鹿児島県の食肉流通センターで食肉になったことがわかった。牛が生まれてから私たちの家庭に届くまでの間に、実に多くの方々関わっていることが理解できる。



畠中先生が産業動物獣医師として大切にされていることは、「生産者と消費者の橋渡しをすること」「科学的視点で両者に接すること」「法令遵守」であるとのこと。使命感を持ってお仕事をされている畠中先生の熱意が子どもたちにも伝わった様子だった。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

子どもたちも模型に釘付け、牛の4つの胃の働き



- 第1胃 食べたエサをためておく大きな胃で、たくさんの微生物がエサを分解する。
- 第2胃 収縮を繰り返し、第1胃のエサを口に戻したり、エサを混ぜて移動させる。
- 第3胃 エサをよくすりつぶし、まだ固いものは第1胃へ戻す。
- 第4胃 エサがドロドロの液になるまで消化する。

診療は往診、出産等の緊急事態に備え夜間待機もある産業動物獣医師

牛の病気には、風邪、下痢などの内科的なものや、蹄（ひづめ）の病気のような外科的なもののほか、中耳炎などの耳鼻科的なものなど様々あるが、現在ではレントゲン検査の機材を持ち運べるようになったため、往診の際に現場で撮影し、モニターで確認できるようになった。

妊娠鑑定はエコーを使用して農家の方と一緒に確認されるとのことで、牛の赤ちゃんが口を開けて呼吸していることがわかる動画も見せていただいた。いよいよ出産となると、夜間に獣医師に呼び出しが入って駆けつけることもある。



《参加者の感想より一部抜粋》

- ・一年ごとの出産などの管理は難しそうだと思った。
- ・一頭の牛だけでも様々な人が関わって食卓まで運ばれていることがわかった。

「安心・安全な食品を生産する手助けをしたい」という使命感を持って産業獣医師の仕事をしておられる畠中先生は、子どもたちに対して「『いただきます』という言葉は命をいただくという意味です。日本ではお弁当も含め、1日一人あたりおにぎり1個分の食べ物が捨てられているのが現状なので、『命をいただいている』ことを考えて食べ物は大切に残さず食べましょう」と話してくださった。産業動物と私たち人間との関わりについて考えることは、「食育」にもつながる。神戸での診療頭数は圧倒的に牛が多いとのことであるが、令和5年度の「産業動物」の分野では牛だけでなく、豚など他の産業動物についても盛り込んでいただく予定である。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

【犬ともだちになろう】

犬のイラストボードや実際の犬に接しながら、クイズや心臓の音を聞くなどを通して「いのち」を実感し、犬のきもちについて学ぶプログラムである。

犬との接し方を学ぶことで、思いもかけない咬傷事故を予防するだけでなく、犬（他者）のきもちを想像したり、寄り添うきもちの大切さを考えるきっかけを与え、心臓の音を聞く拡張心音計（心臓の音を拡大してスピーカーから聞くことができる機械）を用い、犬や子どもたちそれぞれの心音を聞くことで、音の違い、速さの違いといった違いに気づき、自分や自分以外の「いのち」の大切さ、「いのち」への共感ができる子どもを育てることを目的としている。

このプログラムには、JAHA（公益社団法人日本動物病院協会）の訪問活動で経験豊富なボランティアの方々と、そのご家族である犬たちに毎回ご協力いただいている。



犬のイラストを見ながら、犬がどんな気持ちかを考え、犬にも人間と同じように感情があることを学ぶ。



犬との挨拶の仕方を教えていただき、実際にボランティアで参加してくれている犬と、それぞれが挨拶をする。



拡張心音計を用いて、犬と子どもそれぞれの心音を聞き比べることで、違いを実感できる。



プログラム終了後の交流時間。子どもたちの緊張もほぐれ、とても楽しそうな様子。

【犬の気持ちをあらわすイラストボード】



④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

【顔の表情のイラストボード】



犬の気持ちを考える際、顔のイラストボードを見せることで、犬がどんな気持ちなのかを、各々子どもたちなりに想像できるように、シンプルな顔の表情になっている。

<各回参加人数>

実施日	参加者	付き添い	ボランティア	参加犬
令和4年 4月17日（日）	12	9	3	3
6月4日（土）	13	13	3	3
10月9日（日）	7	5	3	3
10月30日（日）	9	8	3	3
12月17日（土）	7	7	3	2
令和5年 3月11日（土）	9	9	2	2
合計	57人	51人	17人	16頭

《参加者の感想より一部抜粋》

- ・犬といっしょにあいさつをしたり、心ぞうの音をきいたことが楽しかった。
- ・かわいい犬とふれあえてこわかったけどかわいかったです。
- ・犬とふれあって、はじめて肉きゅうとか体にさわられて楽しかったです。そして、他の人が犬をさんぽしているときにいかせることを教えてくれたのでよかったです。
- ・いろいろな犬をさわれたりふれあい方を知れたり、体であらわすひょうげんをしれて、よかったです。

このプログラムを通し、子どもたちは犬との正しい接し方を学ぶことで、日常において安全に犬と接する方法を知ることができた。イラストを通して、犬にも感情があり身体のいろいろな部分を使って気持ちを表しているということを学んだり、犬や自分たちの心音を聞くことで、犬も自分たちも同じように生きていることを理解し、自分や自分以外の「いのち」についても考えるきっかけが持てる場となった。犬を飼っていない子どもの参加が多く普段接する機会が少ないため、どのように犬に接したら良いのか戸惑う子どもは、ボランティアの方々から犬の触り方を教えてもらい、触ることができたことでそれぞれ自信にもつながった様子。実際に犬と接することで、より身近に犬を感じることができたと思われる。また、今年度においては就学前の幼児も安全に参加することが出来た。安全管理に配慮し、未就学児の受け入れも継続していきたい。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

【いきものといっしょ】（毎週土曜日10:30～11:30）

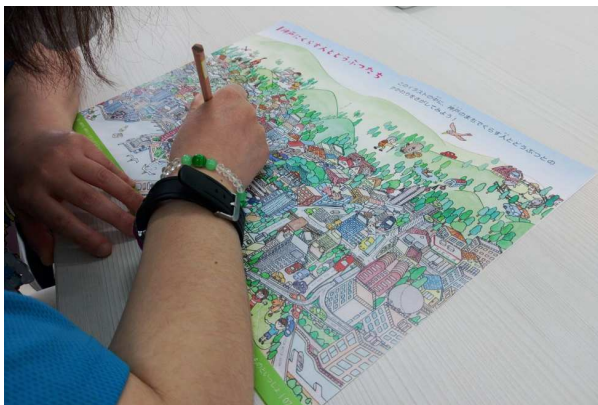
センターに来所した子どもたちに対し、神戸市副読本「いきものといっしょ～みぢかなどうぶつに目をむけてみよう～」を活用し、動物たちのきもちについて考えるプログラムを実施する。他者に対する共感や思いやりといった情操や、動物や自然に対する理解や責任といった態度の醸成を図る。



神戸市副読本「いきものといっしょ～みぢかなどうぶつに目をむけてみよう～」



家で飼っている犬や猫、家の周りにいるカラスやスズメ、学校で飼っているカメやウサギ、山にいるイノシシなど、自分の経験から書き込んでいく。自分たちの家庭の中にあるペットは家族で世話をし、学校で飼育している動物はみんなで世話をし人間と関わっているが、自然の中で生きている野生動物は自分の力で生きているということに気づいていく。



「神戸にくらす人と動物たち」のイラストマップの中では、様々な人と動物の関わりを探す。「車内にいる犬」「一部屋に詰め込まれている猫」「捨てられている猫」「鳩に餌をやっている人」「公園に放置されたままの犬のフン」等の関わり方に対して、自分たちは何が出来るのか、どうしたらより良くなるのか等の正しい関わり方について意見を出し合う。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業



ペット、学校飼育動物や家畜、野生動物それぞれの気持ちを考え、どんなことに気がつけたら良いのか、自分の考えを書き込み、発表してもらった。



家族と一緒に相談したり、考えながら記入している。子どもたちだけでなく、保護者も一緒に改めて動物との関わりを考えることで家庭に帰ってからも話題にしたり、振り返ることができる。

<各回参加人数>

実施日	参加者	保護者	合計
令和4年 4月30日（土）	1	2	3
5月14日（土）	3	1	4
5月21日（土）	2	1	3
6月11日（土）	1	1	2
7月9日（土）	5	2	7
8月6日（土）	4	3	7
8月13日（土）	3	2	5
8月19日（金） （サマースクール）	20	25	45
8月20日（土）	1	1	2
9月10日（土）	2	1	3
9月24日（土）	1	1	2
10月29日（土）	2	1	3
令和5年 1月7日（土）	3	2	5
合計	48人	43人	91人

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

《参加者の感想より一部抜粋》

- ・ ペットなどの動物はともに人間と生きるということがわかった
- ・ どうぶつのいのちがどれだけだいじかしくて楽しかった。
- ・ みちかにいるどうぶつについて考えることがあまりなかったからそれができた。
- ・ 街の絵の中からどんな風に生き物がすごしているのかを考えたりすることができた。

**きみの近くには
どんなどうぶつがいるかな？**

わたしたちは、たくさんのどうぶつとかかわりながら生きています。みのまわりに、どんなどうぶつがいるかかんがえてみましょう。知っているいきものを書きこんでみよう！

まちをあるいているとき

見つけたよ！

02 | 神戸市・きみの近くにはどんなどうぶつがいるかな？

**どうぶつとのかかわりかたを
かんがえてみよう**

それぞれのどうぶつのきもちをかんがえて、書きこんでみてください。また、どんなことにちゅういをすればよいでしょうか？

ペット (わたしたちのかていの中にあるどうぶつ)

→ ・いっしょせわをします
・あいじょうをそそいであげます

10 | 神戸市・どうぶつとのかかわりかたをかんがえてみよう

神戸市副読本の内容を通して、人と動物の正しい関わり方について学び、動物に対する責任についても考えてもらうことができ、家族で参加するケースが定着している。家族で参加することで学んだ内容を家庭に帰ってからも話題にする機会が提供できている。週に1回開催日を設けているが、集客面では、なかなか参加者が増えないことが課題となっている。引き続きふれあい室開放時や子ども向けのプログラム開催時に参加を呼び掛け、学びの場を広げていけるよう工夫したい。また、これまでは毎週土曜日に固定して開催してきたが、来年度は、犬猫の譲渡前講習の開催日に合わせ、毎週土曜日または日曜日の開催とし、曜日を固定せずに参加を促したい。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

【「いのちの教育」プログラム】

「いのちの教育」プログラムは、2012年に奈良県で開発された主に小学生を対象としたプログラムであり、公益社団法人Knotsは同年6月より「いのちの教育」普及展開について奈良県と連携協定を結び、10年以上にわたってプログラムの普及展開や内容のブラッシュアップなどに関わっている。

管理運営業務を受託しているこうべ動物共生センターにおいても、動物共生教育事業として「いのちの教育」プログラムを導入している。このプログラムは、人間が一方向的に動物をかわいがるといふ「愛護」から、**人と動物の関係性を知り、お互いを尊重する「共生」に重点**を置いた内容になっており、子どもたちが自ら参加するアクティブラーニングの手法で3つのプログラムを通して「気づき」「共感」「責任」というステップを通し、相手の立場を想像しながら互いの「いのち」の大切さを学ぶ。他者への理解を深め、共感・思いやりの心を育て、規範意識を醸成し、心豊かな市民の育成に貢献する。

令和4年度は、神戸市立泉台小学校より実施依頼があり、2年生2クラスで実施した。

実施日時：令和4年6月9日（木）／7月14日（木）／9月8日（木）2限目・3限目

実施場所：神戸市立泉台小学校 多目的室

講師：公益社団法人Knots

事務局長 北村美代子／企画教育部 企画教育係 金藏江津子

参加人数：児童61名（2クラス） 教員3名 クラスごとに授業を行った

【プログラムⅠ「私たちと動物との関わり」】6月9日（木）

プログラムⅠでは、子どもたちが大型の張り子を「街」「牧場」「自然」の3つのすみかに運ぶ。「街」で暮らし人間が最後まで世話をする《ペット》、「牧場」で暮らし人間の役に立つために育てられている動物で、人間が管理し、世話をしている《家畜》、「自然」の中で暮らし、人間が世話をせず自分の力で生きている《野生動物》が、それぞれの環境や人間とどのようにつながっているのかということに、子どもたちが自ら気づいていく。



張り子の動物たちを3つのすみかに運び、人間と動物がどのようにつながっているのかを一緒に考えつつ、「街」で暮らし人間が最後まで世話をする《ペット》、「牧場」で暮らし人間の役に立つために育てられている動物で、人間が管理し、世話をしている《家畜》、「自然」の中で暮らし、人間が世話をせず自分の力で生きている《野生動物》という動物とそれぞれの関わり方があることに気づく。



④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

【プログラムⅡ「動物と私たちのいのちは同じ」】 7月14日（木）

プログラムⅡでは、動物にも人間と同じように感情があり、それぞれの動物には、私たちと同じように「生きるために必要なもの（ニーズ）」があり、**気持ちがあることを学ぶ。「生きている証拠」**を探し、「いのち」を実感できるものとして拡張心音計を用いて子どもたちひとりひとりの心臓の音を聞き比べ、同じ人間でもひとりひとりの心音に違いがあることを理解していく。こうした体験を通して、**人間と動物が同じたったひとつの「いのち」を持っていて、「こんなふうに住らしたい」というニーズを持っている存在**であるという「共感」を生む。

全員の心臓の音を聞き終わった後に、なぜ一人ひとりの心臓の「音の大きさ」「速さ」「リズム」が違うかを子どもたちにたずね、**ひとりひとり違う人間だから、心臓の音＝「いのちの音」もひとりひとり違うのだと気づく。**自分の持っている「いのち」は世界でたったひとつのもの。そのたったひとつの「いのち」は、私たち人間だけが持っているものではなく、動物も同じように持っていることを理解する。



拡張心音計（心臓の音を拡大してスピーカーから聞くことができる機械）



人間と同じように、動物にも「こんなふうに住らしたい」というニーズがあることを2枚のパネルの絵を見ながら、それぞれの動物の気持ちを考えた。



左上のパネルでは、挙手で意見を出してもらい、「早く散歩に行きたい」「早く走りた
いよ」など、現在の犬の気持ちを想像して意見を出してもらった。

右上のパネルについては、ミニホワイトボードを使って思いつく限りの犬の気持ちを記
述してもらった。「家族だけ楽しそう」「自分はひとりぼっちでさびしい」「もっとか
まってほしい」「自分だけ暗いところにいるのは嫌だ」「体もマットもきれいにしてほし
い」など、多くの意見が出た。

相手の気持ちを想像することで、動物にも「こんなふうに住らしたい」というニーズを
持っている存在であり、「動物にもここもある」ことを知る。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業 【プログラムⅢ「動物のために私たちができること」】 9月8日（木）

オープンスクールにて実施

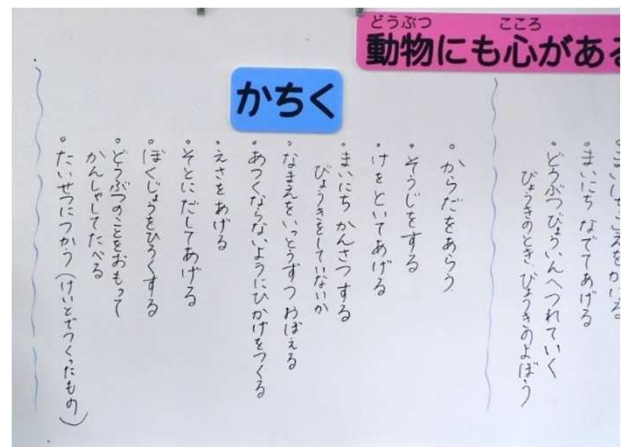
プログラムⅢでは、私たちの周りにいる動物たちが幸せに暮らすためにどんなことができるのか、何をしなければならないか、**私たち人間が果たすべき「責任」**について考える。**自分たちが動物の「いのち」のために果たすことができる「責任」**を「**私たちと動物とのやくそく**」として認識させ、身近なところから自分たちができることを考える。

「ペット」「家畜」「野生動物」が幸せに暮らすために、自分たちにできることを考えた。ここでもホワイトボードを活用し、みんなの前で意見を述べるのが恥ずかしい子どもも、自分の意見を書き込んで記録に残すことで、授業に参加したという一体感を生む工夫がされている。



《家畜》と同様に人間が世話をする《ペット》にも共通して考えられる「毎日エサをあげる」「体を洗う」「病気をしていないか毎日観察する」というような意見だけでなく、「牧場を広くする」「暑くならないように日陰をつくる」「掃除をする」というような《家畜》が暮らす環境についての意見もあった。

また、人間の役に立つものを与えてくれる《家畜》に対して、「動物のことを思って感謝して食べる」「大切に使う（糸で作ったもの）」といったことにも思いを馳せることができるため、食育や給食指導にもつながっている。

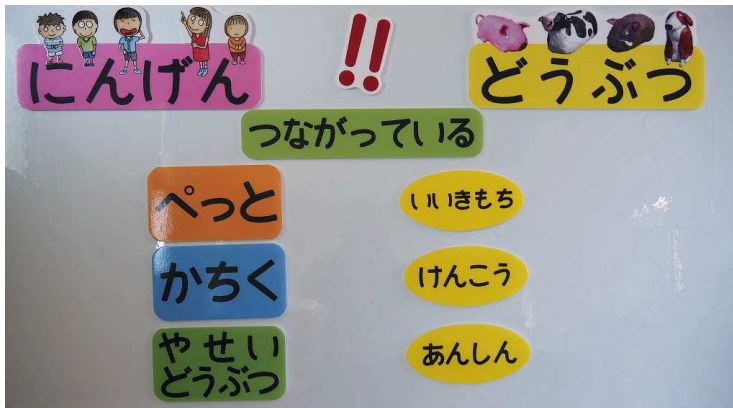


《野生動物》は人間が世話をせず自分の力で生きている動物であるため、《ペット》や《家畜》のようにエサを与えたり体を洗って清潔にしたりしない。《野生動物》のすみかである「自然」に対してできることを考える。

「ごみのポイ捨てをしない」「動物を驚かさなように大声を出さない」「森を破壊しない」「木を植える」など、小学校低学年の学校教育では、まだ「環境」という概念を授業の中では指導していないが、人間や動物を取り巻く環境の大切さを自ら感じ取ってくれるようになる。

④ 「一緒に学ぼう！ For Kids」 子どもを対象にした動物共生教育事業

各プログラム実施の前に、前回の「ふりかえり」に十分な時間を費やしている。この「ふりかえり」の重要性については、奈良県「いのちの教育」研究協議会においても指摘されており、「ふりかえり」を行うことによって長期的に子どもたちの記憶の中に学習効果が定着すると言われている。



プログラムの要所要所で、パネルを見ながら全員で声に出して読み上げている。キーワードとなる言葉に対しては、次のプログラムの導入部分につなげるため、記憶の固定化を促す工夫がされている。

《子どもたちの感想より一部抜粋》

- ・ どうぶつの気持ちがよくわかった。
- ・ ペットだけでなく、自然のいきものことも教えてくれてありがとう。いきものについてよくわかりました。
- ・ いのちは人間にもどうぶつにもあるとわかりました。
- ・ どうぶつには心がないと思っていたけど、心があると知ってもっとくわしく知りたいです。
- ・ 人間と動物がつながっていると初めて知りました。
- ・ 知らないことがまだいっぱいあるから、また授業をしに来てください。
- ・ 学校に来てくれてありがとう。今度はこうべ動物共生センターに行きます。
- ・ 動物たちがもっと元気に暮らせるようにします。
- ・ 色々教えてくれたから、少し動物に興味をもちました。人間と動物は共存して生きるべきだと思いました。

こうべ動物共生センターの事業として、神戸市立小学校で初の「いのちの教育」プログラムを実施できた。プログラムⅢについては、オープンスクールの日に設定していただき、希望する保護者にも授業を見学していただけるよう、校長先生、教頭先生、担任の先生方にご配慮いただいた。保護者の方の感想を直接お聞きすることはできなかったが、家庭でも、親子の会話の中で「ふりかえり」をしていただけなら幸いである。挙手では決まった子どもの発言が多い中、ホワイトボードを活用して自分の意見を書いて発表する場面では、全員が発表できたクラスもあった。また、自分が発表しようと思っていたときに同じ意見が先に出た場合、自分が書いた他の意見を発表するなど、積極的に授業に参加する姿も見られた。

張り子の動物を使ったこの「いのちの教育」プログラムは、動物アレルギーや動物が苦手な子どもも参加が可能であり、生体を使用しないため動物のストレスがなく、実施者も「動物に負担をかけている」というプレッシャーから解放されるというメリットがあり、子どもたちが心を開きやすくイメージしやすい動物を入り口とした汎用性の高い教育プログラムである。動物からの学びは、自分以外の他の存在に気づくこと、他者の心を知り、共感したり、感情移入することで、関わる他者に対して果たすべき責任がひとりひとりにあることなどを学ぶことができる。自分のことから実行し、他者や社会全体の課題を自分の課題として捉え、その解決に向けて自ら行動を起こすことができる「持続可能な社会の創り手」の育成にも貢献できる。令和5年度についても、泉台小学校からは継続実施の依頼があり、すでに実施日を調整済である。継続実施の依頼に応えつつ、実施校を増やしていくために今後も環境衛生課や教育委員会等と相談・調整を行っていく。